

エリザベス・ベネットの新しさ

——『高慢と偏見』から読み取るイギリス社会の変化

向井秀忠

Jane Austen が描く世界は、姪 Anna に当てた手紙の中で使った言葉 “Three or four families in a country village is the very thing to work on.” (1914年9月9日付) がしばしば引用され、広い世界の事情には疎く、持ち前の観察力で微妙な人間関係を細かに描き出したものと、今でも紹介されることが多い。確かに、彼女の作品はどれもアッパー・ミドルの家庭や社交界を舞台に、そこで繰り広げられる恋愛と結婚の物語を中心に進められるものであるから、そのような理解もあながち誤ったものであるとは言えない。

しかしながら、彼女の作品を丁寧に読み解いていくと、日常レベルを超えたもっと大きな世界へと開かれていることがわかってくる。1813年に出版された *Pride and Prejudice*¹ もその例外ではなく、例えば、ヒロインの Elizabeth Bennet が Fitzwilliam Darcy や Lady Catherine de Bourgh などと交わす会話を通して、当時のヨーロッパを席卷していた啓蒙思想とのつながりを見出すことができる。

今回は、まず、Austen が執筆活動をした摂政期の後にくる Victoria 時代における評価を確認することで、彼女の作品の特徴について考えてみたい。

1 テキストには次のものを使用した。Jane Austen, *Pride and Prejudice*, The Cambridge Edition of the Works of Jane Austen, Pat Rogers, ed. (Cambridge UP, 2013).

次に、Mr. Darcy の最初の求婚の場面および Lady Catherine と対峙する場面における Elizabeth の反応を通して、時代による「ジェントルマン」像の移り変わりを読み解いていきたい。そして、その移り変わりの背景には、ヨーロッパ啓蒙思想の影響があり、そこにこそこの作品の主人公の「新しさ」があることを探っていく。

1. Victoria 時代の Austen

小説家としての Austen の評価は、これまで一貫して高かった訳ではなく、時代の嗜好性によって浮沈があったというのも当然である。例えば、彼女の姪の Fanny Knight は二人の叔母について次のように言っていたという。

[Jane] was not so refined as she ought to have been from her talent . . . They [the Austens] were not rich & the people around with whom they chiefly mixed, were not all high bred, or in short anything more than mediocre & they of course tho' superior in mental powers and cultivation were on the same level as far as refinement goes . . . Aunt Jane was too clever not to put aside all possible signs of “common-ness (if such an expression is allowable) & teach herself to be more refined . . . Both the Aunts [Cassandra and Jane] were brought up in the most complete ignorance of the World & its ways (I mean as to fashion &c) & if it had not been for Papa's marriage which brought them into Kent . . . they would have been, tho' not less clever & agreeable in themselves, very much below par as to good Society & its ways.²

これは、70歳を超えた Fanny が亡くなった叔母たちについて思い出しながら妹に宛てた手紙の中にある言葉であるが、Austen が “almost another sister” (1808年10月7-8日付の手紙) と書き記すほど可愛がって

2 Claire Tomalin, *Jane Austen : A Life* (Knopf, 1997) pp. 134-35.

いたという姪の鼻持ちならない恩知らずなものとして Austen 愛好家からは評判が悪い。しかしながら、そのように Fanny 個人の人間性に帰すべきものではなく、むしろ時代や階級の嗜好性の相違や変化を読み取ることができる好例と理解するほうが公平であろう。Fanny は、叔母が執筆活動を行った摂政期ではなく、その後の Victoria 時代を生き、また、教区司祭の娘であった叔母と異なり、地主の娘として生まれ育ったことを考えれば、自分を可愛がってくれた叔母について、このような違和感を覚えたとしても不思議ではない。

この Fanny の感覚、つまり次世代の Victoria 時代の読者たちの立場で、例えば、*Pride and Prejudice* の次の場面を読んでみるとどうなるだろうか。

In Meryton they parted ; the two youngest repaired to the lodgings of one of the officers' wives, and ①Elizabeth continued her walk alone, crossing field after field at a quick pace, jumping over stiles and springing over puddles with impatient activity, and finding herself at last within view of the house, ②with weary ankles, dirty stockings, and a face glowing with the warmth of exercise.

She was shown into the breakfast-parlour, where all but Jane were assembled, and ③where her appearance created a great deal of surprise. That she should have walked three miles so early in the day, in such dirty weather, and by herself, was almost incredible to Mrs. Hurst and Miss Bingley ; and Elizabeth was convinced that they held her in contempt for it. She was received, however, very politely by them ; and in their brother's manners there was something better than politeness ; there was good humour and kindness. Mr. Darcy said very little, and Mr. Hurst nothing at all. ④The former was divided between admiration of the brilliancy which exercise had given to her complexion, and doubt as to the occasion's justifying her coming so far alone. The latter was thinking only of his breakfast. (Ch. 7. 下線筆者)

これは、主人公の Elizabeth が、風邪で寝込んでしまった姉 Jane を心配のあまりに見舞う場面であり、現代の読者には、彼女の姉を思い遣る強さ

が感じられるだけであろう。ところが、そんな Elizabeth の行動は、下線部③にある通り、その場にいた人たちにとっては「とても信じられないもの」と映っているのである。その理由は、おそらく下線部①や下線部②にある様子、つまり、アッパー・ミドルの階級の若い娘が、付き添いもなく、長い距離を歩いてくる、しかも雨上がりだったために泥だらけになりながら、というのが当時の「マナー」に反していたからである。Elizabeth が「マナー」を逸脱しているのであれば、Bingley 姉妹たちの反応も不当に的はずれなものではない。さらに道徳的に厳しくなる Victoria 時代の読者にとっても、この個所は、加えて、「脚」にかかわる“ankles”という言葉がそのまま使われているだけではなく、“a face glowing with the warmth of exercise”と女性キャラクターの肉体性を感じさせるような描写もあり、それらが作者が洗練されていない印象を与えていたのかもしれない。事実、Austen の小説は、この時代には一時的に人気落ちてしまったとされている。

ここで注目したいのは、下線部④にある Mr. Darcy の反応である。人がいい Mr. Bingley は Elizabeth を温かく迎え（「人がいい」と言うより、新興の地主であるため、この階級の「マナー」をまだ十分に理解していないことの証左とも理解できる）、俗物的な Bingley 姉妹が見下すような感じにある中で、Mr. Darcy は Elizabeth の火照った顔色の魅力と彼女の「マナー」の逸脱ぶりとは相反する感じを抱いている。しかしながら、運動によって赤く火照った顔色に敢えて魅力を感じる Mr. Darcy の感性には、この場にいる他の人たちとは異なった、時代の制約にだけ縛られることがない「新しさ」があることは間違いないだろう。この点が、これから論じる *Pride and Prejudice* という作品が持ち得た「新しさ」へとつながっていくのである。

2. Mr. Darcy の求婚, Elizabeth の拒絶

主人公の Elizabeth を含め、作品の登場人物たちのほとんどは Mr. Darcy が彼女に求婚したことに驚く（ただし、Elizabeth の親友 Charlotte Lucas だけが例外で、彼女は最初から Mr. Darcy の Elizabeth に対する強い関心について指摘しており、その慧眼ぶりを示している）。そんな Mr. Darcy の 1 回目の求婚の言葉は次のようなものであった。

“And this,” cried Darcy, as he walked with quick steps across the room, “is your opinion of me! This is the estimation in which you hold me! I thank you for explaining it so fully. My faults, according to this calculation, are heavy indeed! But perhaps,” added he, stopping in his walk, and turning towards her, “these offenses might have been overlooked, had not your pride been hurt by my honest confession of the scruples that had long prevented my forming any serious design. These bitter accusations might have been suppressed, had I, with greater policy, concealed my struggles, and flattered you into the belief of my being impelled by unqualified, unalloyed inclination ; by reason, by reflection, by everything. But disguise of every sort is my abhorrence. Nor am I ashamed of the feelings I related. They were natural and just. Could you expect me to rejoice in the inferiority of your connections? — to congratulate myself on the hope of relations, whose condition in life is so decidedly beneath my own?” (Ch. 34)

求婚される側にすれば、これは自分の親族関係を貶めるとんでもない言葉であり、当然のごとく、Elizabeth も頭にきて、求婚を受け入れるどころではなく、はっきりと拒絶をする。それだけではなく、次のように付け加えた。

Elizabeth felt herself growing more angry every moment ; yet she tried

to the utmost to speak with composure when she said :

“You are mistaken, Mr. Darcy, if you suppose that the mode of your declaration affected me in any other way, than as it spared me the concern which I might have felt in refusing you, had you behaved in a more gentlemanlike manner.” (Ch. 34, 下線筆者)

Bennet 家の年収、親戚関係、そして家族の立ち居振る舞いの品のなさなどを考えると、よもや自分からの求婚が拒絶されることなどないだろうと考えていた Mr. Darcy にとって、Elizabeth の断固とした拒否の態度は心外であっただろう。しかしながら、それ以上にショックだったのは、上記の下線部分の言葉であった。後に、彼は次のように語っている。

“I cannot be so easily reconciled to myself. The recollection of what I then said, of my conduct, my manners, my expressions during the whole of it, is now, and has been many months, inexpressibly painful to me. Your reproof, so well applied, I shall never forget : ‘had you behaved in a more gentlemanlike manner.’ Those were your words. You know not, you can scarcely conceive, how they have tortured me ; — though it was some time, I confess, before I was reasonable enough to allow their justice.” (Ch. 58, 下線筆者)

「もっとジェントルマンらしく振る舞ってくださっていたら」という Elizabeth の言葉は、「ジェントルマンらしく振る舞う」ことを心がけていたというよりも、おそらくは自分が「ジェントルマンらしくない」などと考えたことさえなかったはずの彼にとって、まさに人生観をくつがえすような強いものであったことは推察できる。そうでなければ、和解した Elizabeth にそのことをわざわざ言わないであろう。

では、Elizabeth から見て、Mr. Darcy のどこが「ジェントルマンらしくない」ように思えたのだろうか。Mr. Darcy の伯母 Lady Catherine de Bourgh は、自分の甥が Elizabeth と結婚するのではないかと危惧を抱く。

そのため、礼儀も顧みず、突然、Bennet 家にやって来て、二人の結婚を思いとどまらせようと次のように Elizabeth を牽制する。

“I will not be interrupted. Hear me in silence. My daughter and my nephew are formed for each other. They are descended, on the maternal side, from the same noble line; and, on the father’s, from respectable, honourable, and ancient — though untitled — families. Their fortune on both sides is splendid. They are destined for each other by the voice of every member of their respective houses; and what is to divide them? ①The upstart pretensions of a young woman without family, connections, or fortune. Is this to be endured! But it must not, shall not be. If you were sensible of your own good, you would not wish to quit the sphere in which you have been brought up.”

“In marrying your nephew, I should not consider myself as quitting that sphere. ②He is a gentleman; I am a gentleman’s daughter; so far we are equal.”

“True. You are a gentleman’s daughter. ③But who was your mother? Who are your uncles and aunts? Do not imagine me ignorant of their condition.”

“Whatever my connections may be,” said Elizabeth, “④if your nephew does not object to them, they can be nothing to you.” (Ch. 56, 下線筆者)

Lady Catherine によれば、自分の娘と Mr. Darcy の結婚は昔から両家の了承事項となっていて、家柄や財産などの点において申し分がない、そこへ Elizabeth のような身分違いの者が割り込んで邪魔などするものではない、というのであった。ここでの Lady Catherine の下線部 ① や下線部 ③ の言葉が、先にも引用した Mr. Darcy が最初の求婚の際に Elizabeth に言った言葉 “Could you expect me to rejoice in the inferiority of your connections? — to congratulate myself on the hope of relations, whose condition in life is so decidedly beneath my own?” (Ch. 34) とすっかり重なっていることがわかる。この伯母と甥はその人間性は大きく違ってはいるものの、二人とも「結婚」をめぐるのは「家柄」が最も大事であると考えている点で一致してい

るのだ。

この個所で興味深いのは、下線部②にあるように、Elizabeth が Lady Catherine に対して、Mr. Darcy も「ジェントルマン」であり、自分も「ジェントルマン」の娘である、だから釣り合いについては問題がないとする反論の仕方である。確かに、Mr. Darcy も自分の父親も同じ地主階級に属しているのだから対等であるという Elizabeth にも一理ある。しかしながら、同じ地主階級でも、かたや貴族と縁組できるような伝統と格式を持ち、桁外れな財産を所有する名家、かたや庶民の親戚がおり、なおかつ十分な持参金を娘に与えることもできない地方地主という点から見れば、それは世間一般の見方とも重なり、Lady Catherine の憤慨にも一理あるとも言える。ここで注目したいのは、下線部④の「本人がいいのなら、あなたには関係ない」という Elizabeth の言葉である。この言葉からこそ、主人公としての「新しさ」を彼女に読み取ることができる。

3. 啓蒙思想と Austen

Austen の小説を順番に読んでみると、物語の展開パターンやキャラクター造型などが共通していることがわかってくる。そのひとつに、彼女が描く教区司祭のほぼ全員が聖職者らしくないことがあげられる。*Northanger Abbey* の Henry Tilney はすっかり地主の息子にしか見えないし、*Pride and Prejudice* の Mr. Collins や *Emma* の Mr. Elton らはタイプは違えど、その俗物根性は相当なものであり、とても教区民のお手本になれるような存在ではない。これから教区司祭となる登場人物としては、*Sense and Sensibility* の Edward Ferrars や *Mansfield Park* の Edmund Bertram などがいるが、いずれも強い信仰心ゆえに聖職者を目指すのではなく、理由はそれぞれで違えど、職業として教区司祭を考えている。*Persuasion* には

Charles Hayter という教区司祭が登場するが、ある地方地主の娘の婚約者と紹介されるだけで、作品において十分に言及されることもない。作者本人が教区司祭の娘であり、兄たちもそれを引き継いだことを考えると、同じように兄弟がそうであった海軍将校が作品において絶賛されているのは大違いである。

この点について考えていくには、*Mansfield Park* という作品が大きなヒントになる。この作品は、他の作品と同じく、一見するだけでは、ヒロインの恋愛と結婚を主なテーマとするもののように思えるが、Austen は姉に宛てた手紙の中で、執筆していたこの作品について、“Now I will try to write of something else, & it shall be a complete change of subject — ordination.” (1813年1月19日付)と書いている。この作品の主題は、“ordination”，つまり「聖職位授与」だという。作者が、自分の作品について語る言葉をどのくらい信じていることができるかは慎重に考える必要はあるが、確かに、*Mansfield Park* には他の作品にはない、教区司祭の社会的役割について議論する場面が描かれている。

主としてその議論を担っているのは、ヒロインが密かに心を寄せる Edmund Bertram と、そんな彼が惹かれている Mary Crawford とである。彼は、自分を慕う従妹の気持ちには気づかず、才気煥発な Mary に思いを寄せているが、自由奔放にも見えるこの女性が教区司祭となる自分の妻としてふさわしいのかどうか自信が持てない。一方、Mary も Edmund を憎からず思いながらも、教区司祭という地味な職業の夫を持つことには我慢できず、何とか彼の気持ちを変えさせようと努力している。そんな中、Edmund は教区司祭の役割の意義を次のように主張している。

“The nothing of conversation has its gradations, I hope, as well as

the never. A clergyman cannot be high in state or fashion. He must not head mobs, or set the ton in dress. But I cannot call that situation nothing which has the charge of all that is of the first importance to mankind, individually or collectively considered, temporally and eternally, which has the guardianship of religion and morals, and consequently of the manners which result from their influence. No one here can call the office nothing. If the man who holds it is so, it is by the neglect of his duty, by foregoing its just importance, and stepping out of his place to appear what he ought not to appear.” (Ch. 9, 下線筆者)

ここで興味深いのは下線部分である。Edmund は教区司祭の役割について、信仰ではなくむしろ「マナーズ」を守る者と説明している。そもそもイングランド国教会は信仰や教義についての議論で興ったのではなく、国王の離婚問題への対処が理由であったこともあり、プロテスタントの他の国々とは信仰に対するスタンスのとり方が異なっているとされている。それにしても、聖職者の社会的役割について、信仰上のものについてはほとんど具体的には触れず、社会の「マナーズ」の守護者と割り切っている点は、彼に限らず、この時代の人びとの考え方の特徴と言えるかもしれない。

この点について、Edmund は、次のようにさらに強調する（特に下線部分）。

“Not, I should hope, of the proportion of virtue to vice throughout the kingdom. We do not look in great cities for our best morality. It is not there that respectable people of any denomination can do most good ; and it certainly is not there that the influence of the clergy can be most felt. A fine preacher is followed and admired ; but it is not in fine preaching only that a good clergyman will be useful in his parish and his neighbourhood, where the parish and neighbourhood are of a size capable of knowing his private character, and observing his general conduct, which in London can rarely be the case. The clergy are lost there in the crowds of their parishioners. They are known to the largest part only as preachers. And with regard to their influencing public man-

ners, Miss Crawford must not misunderstand me, or suppose I mean to call them the arbiters of good-breeding, the regulators of refinement and courtesy, the masters of the ceremonies of life. The manners I speak of might rather be called conduct, perhaps, the result of good principles ; the effect, in short, of those doctrines which it is their duty to teach and recommend ; and it will, I believe, be everywhere found, that as the clergy are, or are not what they ought to be, so are the rest of the nation.” (Ch. 9, 下線筆者)

Austen が描く教区司祭に聖職者的な印象が希薄なことを考えていくと、彼女がいわゆるヨーロッパ啓蒙思想の時代に生きていたことに行き当たる。イマヌエル・カントは、『啓蒙とは何か』(1784)の中で「啓蒙」について次のように書いている。

啓蒙とは何か。それは人間が、みずから招いた未成年の状態から抜けでることだ。未成年の状態とは、他人の指示を仰がなければ自分の理性をつかうことが出来ないということである。人間が未成年の状態にあるのは、理性がないからではなく、他人の指示を仰がないと、自分の理性を使う決意も勇気ももてないからなのだ。だから人間はみずからの責任において、未成年の状態にとどまっていることになる。こうして啓蒙の標語とでもいうものがあるとすれば、それは「知る勇気をもて (サペーレ・アウデ)」だ。すなわち「自分の理性を使う勇気をもて」ということだ。³

それでは、「知る勇気」を持ち、「自分の理性を使う勇気」を持つためにはどうすればよいのだろうか。ドゥニ・デイドロは『ブーガンヴィル航海記補遺』(1772)の中で次のように言う。

超自然的存在や神にもとづく制度は、時がたつにつれて市民的・国家的法律に変貌していき、そのためますます強固で永続的なものになってしまう。

3 イマヌエル・カント、『永遠平和のために／啓蒙とは何か 他3編』木田元訳(光文社古典新訳文庫・2007年) p. 10.

ということ。他方、市民的・国家的制度のほうも、しだいに神聖化されていき、ついには超自然的存在や神に基礎づけられた掟にまで変質してしまう、ということです。⁴

ディドロのここでの批判の念頭に教会の存在があることは明白であろう。中世以来、ヨーロッパ社会では、キリスト教会に代表される伝統的で妄信的な権威容認や思想受容に基づき人びとが生活してきたが、理性の啓発によって人びとの生活の改善と進歩を図ろうとするという動きが「啓蒙」思想と連動して起こってきた。必要なことを「知る勇気」を持ち、物事の判断を行う「自分の理性を使う勇気」を合わせ、自分の頭で考えることの必要性が強く説かれたのである。

このような思想的な動きの中で、人びとは国家や教会を盲信するのではなく、理性的に宗教や信仰を捉えようと試み、それが宗教の世俗主義へとつながっていく。イングランド国教会における教区司祭の役割が、信仰上の指導者や教義の解釈者としてのものではなく、社会における道徳、つまり人びとの生活規範の守護者としての役割が強調されるようになったのもその影響からであろう。*Mansfield Park* の Edmund の議論などを踏まえて考えれば、Austen が描く教区司祭の聖職者らしくなさを通して、彼女もまたヨーロッパ啓蒙主義の影響を受けていると考えることができる。

4. Elizabeth の「新しいさ」

ヨーロッパ啓蒙主義の影響、つまりカントが言う「他人の指示を仰がなければ自分の理性を使うことが出来ない」状態から脱し、自分の価値観でもって生きることを試みるようになっていく過程は *Pride and Prejudice* の中に

4 ブーガンヴィル『世界周航記』（山本淳一訳）／ディドロ『ブーガンヴィル航海記補遺』（中川久定訳）、「シリーズ・世界周航記2」（岩波書店・2007年）p. 161.

も見出すことができる。改めて、そのことについて「ジェントルマン」をキーワードに考えてみたい。

先にも触れたように、Lady Catherine にとっての「ジェントルマン」とは、家柄や階級で決まるものであり、最初の求婚での Elizabeth の拒絶を経験する前の Mr. Darcy もそれと似たようなものであった。しかも、彼は自分がこれまで「ジェントルマン」らしく振る舞い、そしてそのような自分が「ジェントルマン」であることに強い自負を持っていた。しかしながら、彼らが抱いている「ジェントルマン」像は、デイドロの言葉を借りれば、長い間、イギリスの社会の中で盲目的に信じられてきたことで、強固で永続的な「市民的・国家的制度」へと変貌したものに過ぎないものであった。だからこそ、Elizabeth が「もっとあなたがジェントルマンらしく振る舞ってくださっていたら」と指摘したことは、ずっと「ジェントルマン」として振る舞ってきたつもりで、そのことに疑いさえ抱いたことがなかった Mr. Darcy にとって、自分の求婚が拒絶されたことにとどまらない大きなショックを与えたのだろう。事実、信頼できる召使いである女中頭の Mrs. Reynolds は、Mr. Darcy がまだ幼い頃から接してきた経験を通して、彼のことを理想的な主人として手放しに絶賛している。

一方、Elizabeth は、そのような「市民的・国家的制度」に基づいた「ジェントルマン」像に拘束されることはない。彼女にとっての「ジェントルマン」とは、家柄や親戚関係だけに基づくものではなく、その人物の人間性により多くの根拠が置かれている。このことは、彼女が、世間に流布している常識や因習に囚われることなく、自分の頭で考えて判断することができる素養のあることを意味している。一方で、周囲からは疑いもなく完璧な「ジェントルマン」と考えられていた Mr. Darcy は、階級意識に囚われている限り、「未成年の状態」にとどまっていることになる。

このように考えていくと、Elizabeth が言う「ジェントルマンらしく振る舞う」ことは、世間一般に常識的とされることに縛られず、自分自身の価値観でもって、曇りなく判断できることを意味しているとわかってくる。例えば、恋愛などの人間関係においても、相手のことを家柄や階級という「市民的・国家的制度」に基づいてのみ考えるのではなく、個人の人間性に基づいて判断することが求められる。彼女にとっては、恋愛や結婚が、社会制度的なものではなく、より個人的なものとなっていることがわかる。Elizabeth の叔父夫妻と交流する機会を持った Mr. Darcy が、彼らをロンドンの一介の商人としてひとくくりで考えるのではなく、すぐれた人間性を有した個人として高く評価するようになったことは、彼が「市民的・国家的制度」を超えて判断をすることができるようになった証となるのであった。

以上のように考えていくと、Elizabeth が Mr. Darcy に向けた言葉 “had you behaved in a more gentlemanlike manner”，そして Lady Catherine に対する言葉 “if your nephew does not object to them, they can be nothing to you” は、小説のヒロインの個人的な感情を超えたものと響いてくる。*Pride and Prejudice* という作品の中に、当時のイギリスにおいて、「未成年の状態」の個人がヨーロッパ啓蒙主義の影響を受け、自らの判断と感覚に基づいて物事を判断できるようになってきた状況を読み取ることができる。そして、Austen は、「ジェントルマン」観が変容していくさまを通して、イギリスの社会が大きく変わっていく姿を描き出していると理解することができるのだ。